Proceedings

博士課程教育リーディングプログラム

京都大学大学院

思修館プログラム総括シンポジウム

第2回思修館の集い

2017 年 10 月 18 日（水）

京都大学国際科学イノベーション棟

京都大学 大学院 総合生存学館

思修館

総括シンポジウム及び第２回思修館の集いプログラム

【総括シンポジウム】

（第１部）
9:30　開会挨拶　寶　馨　総合生存学館長
9:40　活動報告　川井秀一　プログラム・コーディネーター
10:00　学生による活動報告発表
　１年　石田　菖、河崎レイチェル慧
　２年　関 大吉、徐　　ソウ
　３年　孫　　燁、田中勇伍
　５年　長沼祥太郎、平野実晴
11:20　休　憩

（第２部）シンポジウム　テーマ「思修館に期待するもの」
13:00　開会挨拶　山極壽一　京都大学総長
　来賓挨拶　三浦和幸　文部科学省高等教育局大学振興課長
13:20　基調講演
　北野正雄　京都大学理事・副学長
　白石晃將　外務省経済局経済安全保障課　外務事務官（修了生）
　森　雅彦　DMG 森精機株式会社取締役社長
14:50　休　憩
15:05　パネルディスカッション
　モデレーター　池田裕一　総合生存学館副学館長
　パネリスト
　　久能祐子　S&R 財団理事長兼 CEO
　　有本建男　政策科学研究院大学教授
　　岩澤康裕　電気通信大学教授
　　中村和男　シミックホールディングス株式会社代表取締役 CEO
　　ンブリ・チャールズ・ボリコ　FAO 駐日事務所長
16:45　パネルディスカッションまとめ　池田裕一　総合生存学館副学館長
17:00　思修館の集いの会場へ移動（ホワイエ）

【第２回思修館の集い】
17:15　乾　杯　湊　長博　京都大学理事・副学長
18:40　参加者からのコメント
　藤原　洋　株式会社ブロードバンドタワー代表取締役会長兼社長 CEO
　望月晴文　東京中小企業投資育成株式会社代表取締役社長
19:00　閉会挨拶　北野正雄　京都大学理事・副学長（中締め）
19:30　最終閉会

Wrap-Up Symposium & 2nd Shishu-Kan Social Gathering

【Wrap-Up Symposium】
（Session I）
9:30　Opening Remarks, Kaoru Takara, Dean, GSAIS
9:40　Report of Activities, Kawai Shuichi, Program Coordinator
10:00　Reports of Activities by Students
　　1st year　Ayame Ishida, Rachael Kei Kawasaki
　　2nd year　Daikichi Seki, Cong Xu
　　3rd year　Sun Ye, Yugo Tanaka
　　5th year　Shotaro Naganuma, Miharu Hirano
11:20　Break

（Session II）
Symposium Theme: “What is Expected from the Shishu-Kan”
13:00　Opening Remarks, Juichi Yamagiwa, President, Kyoto University
Greetings from Guest Speaker, Kazuyuki Miura, Chief Officer, University Section of the Department of Higher Education, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

13:20　Keynote Lectures
- Masao Kitano, Executive Vice-President, Kyoto University
- Kosuke Shiraishi, Economic Security Division, Economic Affairs Bureau Ministry of Foreign Affairs of Japan (Shishu-Kan Alumnus)
- Masahiko Mori, President, DMG Mori Co., Ltd.

14:50　Break
15:05　Panel Discussion
Moderator: Yuichi Ikeda, Vice-Dean, GSAIS
Panelists:
- Sachiko Kuno, Co-Founder, President and CEO, S&R Foundation
- Tateo Arimoto, Professor, National Graduate Institute for Policy Studies
- Yasuhiro Iwasawa, Professor, The University of Electro-Communications
- Kazuo Nakamura, Founder, Chairman and CEO of CMIC Holdings Co., Ltd.
- Mbuli Charles Boliko, Director, FAO Liaison Office in Japan
16:45　Summary of the Panel Discussion, Yuichi Ikeda, Dean, GSAIS
17:00　Moving to the Venue of Shishu-Kan’s Social Gathering（Foyer）

【2nd Social Gathering of the Shishu-Kan】
17:15　Toast, Nagahiro Minato, Executive Vice-President, Kyoto University
18:40　Comments from the Participants
- Hiroshi Fujiwara, Chairman, President & CEO, BroadBand Tower
- Harufumi Mochizuki, Chairman, President & CEO, Tokyo Small and Medium Business Investment & Consultation Co., Ltd
19:00　Closing Remarks, Masao Kitano, Executive Vice-President, Kyoto University
19:30　Final closing

第一部

総括シンポジウムの開催にあたって

博士課程教育リーディングプログラム「京都大学大学院思修館」は、今年度でプログラム期間の最終年度であります７年目を迎えました。この７年間の歩みを振り返り、思修館構想が平成 25 年度に総合生存学館という新設の大学院として花開いたこと、そして、思修館プログラムをこの大学院のもとで実施し、世界に羽ばたくリーダーの育成プログラムとして結実しつつあることなど、これまでの成果をとりまとめご報告し、また、改善点なども総括してさらなる発展の機会とさせていただきたいと存じております。

午前中には、総合生存学館（思修館）の主役である在学生から研究・学習の内容などを発表してもらいます。学生諸君の成長ぶりをご覧いただければ幸いに存じます。

山極壽一総長、リーディングプログラムの責任者である北野正雄理事・副学長（教育担当）、大学院総合生存学館の担当理事である湊長博プロボスト理事・副学長にもご出席いただきます。

この７年の間に資金面、精神面、さらには熟議などの教育面でもたいへんお世話になったサポーターの方々にもご臨席いただき、講演やパネルディスカッションにもご参加いただきます。

各々のお立場から、総合生存学館及び思修館プログラムの今後についても忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

関係各位のこれまでの御貢献に心より感謝申し上げますとともに、引き続き御支援・御協力を賜りますようよろしく願い申し上げます。

大学院総合生存学館
学館長　寶　　馨

ご挨拶

本日はご多忙のなか博士課程教育リーディングプログラム「京都大学思修館」プログラムの総括シンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

思修館プログラムが平成 23 年 12 月に博士課程教育リーディングプログラムに採択されてから 6 年が経過しました。学内研究科からプログラム履修生を採択して、24 年 10 月にプログラムを実質的にスタートさせ、ちょうど本年 3 月にそのプログラム履修生のうちの 3 名が卒業しました。プログラム履修生 1 期生 4 名（5 年次休学者を含め）は、現在、国際機関（国連食糧農業機関 FAO、東アジア・アセアン経済研究センター ERIA）、政府機関（外務省経済局）、（コンサルタント系）グローバル企業にそれぞれ就職して、国際的に活躍しています。

本プログラムの実施組織として、平成 25 年 4 月に大学院総合生存学館が設置され、京都大学として総合学術の学位を授与する研究科が生まれました。現在、ようやく総合生存学館 1 期生から 5 期生が揃い、専門（総合生存学）研究を柱に、海外武者修行やプロジェクトベースリサーチ（PBR）などの実践型研究と熟議や八思などのリーダー教育、国際教育を加えたプログラムに取り組んでいます。文理融合、トランスディシプリナリーを特徴とし、社会問題の解決を目指す実践の学としての総合生存学を修め、国際社会で活躍するリーダー育成を教育目標にした学館の教育研究は、大学の国際化、大学院教育の改革、民間企業・国際機関・官庁との社会連携の強化など、大学の新たな展開に大いに貢献できるものと信じています。

一方、プログラムの実施には大学執行部や他研究科の理解と協力、さらに熟議講義、武者修行の受入れ、プロジェクトベースリサーチ（PBR）での協働、学位取得者の就職など学外機関の連携と支援が欠かせません。また、社会が全体としてリーダー人材育成の取り組みに対して理解とサポートをする仕組みの構築も不可欠です。

文科省のプログラム補助金が今年度で終了する大きな節目を迎えるなか、本総括シンポジウムはこれまでの思修館の取り組みの成果を内外に広くアピールするとともに、学内外の支援者から「思修館に期待するもの」や「今後の課題」について忌憚のないご意見を賜り、これを糧として、明日の総合生存学館の教育研究をより良いものをしていく所存です。

皆様のこれまでのご支援とご協力に深く感謝申し上げるとともに、今後ともお力添えを賜りますようお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

京都大学大学院思修館プログラムコーディネータ
大学院総合生存学館　特定教授　　川井秀一

京都大学大学院思修館プログラム

総括シンポジウム

平成29年 10月 18日

履修生の構成（平成29年4月1日現在）

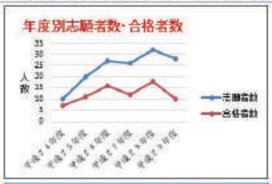
	総合生存学館生					履修生		修了生
	1回生	2回生	3回生	4回生	5回生	5回生	合計	
学生数合計	**11人**	**12人**	**12人**	**8人**	**6人**	**1人**	**50人**	3人（うち1人は研究指導認定退学）
男	2	7	4	7	5	1	26	2
女	9	5	8	1	1	0	24	1
うち留学生	**3**	**3**	**3**	**0**	**1**	**0**	**10**	1
男	0	2	2	0	0	0	4	0
女	3	1	1	0	1	0	6	1
うち京大出身	**4**	**3**	**2**	**4**	**3**	**1**	**17**	1
男	1	3	2	3	3	1	13	1
女	3	0	0	1	0	0	4	0
うち社会人経験あり	**4**	**2**	**3**	**2**	**1**	**0**	**12**	0
男	0	1	1	2	1	0	5	0
女	4	1	2	0	0	0	7	0

2

学生募集と選抜

（ア）リーダーを養成するための学位プログラム等の構築

- 志願者数は一貫して募集定員（20名）を上回っている。
- 一定のレベル以上の志願者を合格としているため、定員に満たない状況が続いている。
- 修士学位の授与、長期履修制度による社会人の博士学位ニーズに対応。博士後期の編入制度の導入を目指す。
- 学内特別選抜の実施
- 入試広報
  - 学内5つのリーディングプログラム合同でオープンキャンパスを平成28年度から開催。
  - 文理融合、学際、国際などの教育カリキュラムを持つ大学にターゲットを絞り、直接当該大学内で入試説明会を実施。共催も提案し、参加者数増。国際教養大学、九州大学、立命館アジア太平洋大学（28年度）、名古屋大学、広島大学（29年度追加）など。
  - 入試説明会の案内を、学内ではHP、Twitter、教務システムに掲載、学外では外務省国際機関人事センターメルマガ、JICA人材募集サイト、河合塾大学院入試情報サイトに掲載し、周知を図っている。
  - 入試説明会の参加者数が増加し、学館への関心が増えている。
  - 学内で「ミニワークショップ」をシリーズで開催し、本学館の魅力や研究内容の発信を図っている。

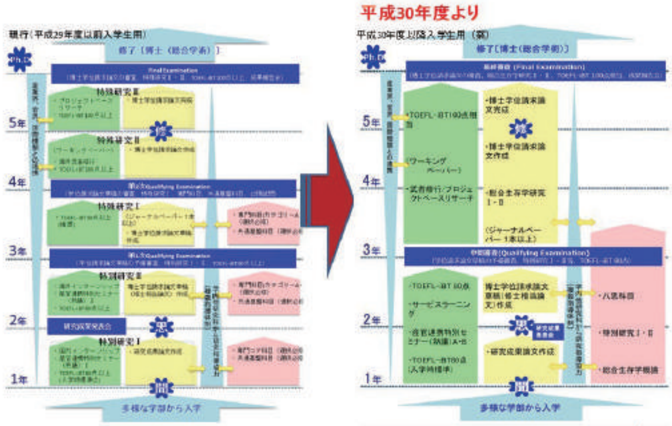


平成30年度入学者選抜（夏季実施）では、志願者数21人、合格者数12人は過去最多。

教育カリキュラムの改革

（ア）リーダーを養成するための学位プログラム等の構築

平成30年度より



4

海外武者修行

（ア）リーダーを養成するための学位プログラム等の構築

世界視点での自らの位置取りと意識の改革に加えて、国際的リーダーとしての意識と責任感及び突破力を体得するため、武者修行中です。

PBRとの連携
（平成29年度）

・地方自治体と協力して小水力発電事業を運営する企業を起ち上げ、自らの専門である再生エネルギーによる地域活性化・投資障壁分析をPBRとして実施。

・海外武者修行先組織にPBR企画を提案し、外部からの資金を獲得して共同でPBRを実施（国連食糧農業機関FAO、世界水協会IWA、世界知的所有権機関WIPO、国連開発計画UNDP）

Creativ-Ceutical@パリ

UNESCO @パリ

5

海外武者修行派遣先一覧

（ア）リーダーを養成するための学位プログラム等の構築

海外武者修行先（平成27－29年）は国際機関を主体として、企業や研究所等に展開

・海外武者修行先の国際機関等における研究レポートの共同執筆の実績（平成27－28年度）OECDレポート、FAOレポート、世界水協会IWAレポート

・海外武者修行先の国連機関、国際NGO団体のHP等における紹介記事の掲載

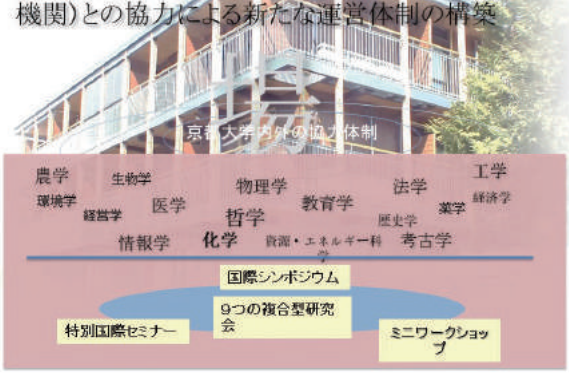
2017年5月8日現在

番号	実施年度	派遣先機関	所在地	派遣期間	実施ステイタス	[illegible]
1	平成27年度	オーストラリア連邦科学産業研究機構（CSIRO）	ニューサウスウェールズ、オーストラリア	[illegible]	実施済	[illegible]
2	平成27年度	東アジア・ASEAN経済研究センター（ERIA）	ジャカルタ、インドネシア	[illegible]	実施済	[illegible]
3	平成27年度	国際連合食糧農業機関（FAO）	ローマ、イタリア	[illegible]	実施済	[illegible]
4	平成27年度	(1)経済協力開発機構（OECD） (2)国際エネルギー機関（IEA）	パリ、フランス	[illegible]	実施済	[illegible]
5	平成28年度	UNDP [illegible]	[illegible]	[illegible]	実施済	[illegible]
6	平成28年度	The International Water Association (IWA)	ハーグ、オランダ	[illegible]	実施済	[illegible]
7	平成28年度	(1)経済協力開発機構 (2)UNDPフィジー事務所	(1)パリ、フランス (2)フィジー	(1) 2016年4月 [illegible] (2) 2016年10月 [illegible]	(1)実施済 (2)実施済	[illegible]
8	平成28年度	Australian Council for Educational Res(ACER)	メルボルン、オーストラリア	[illegible]	実施済	[illegible]
9	平成28年度	世界知的所有権機関	ジュネーブ、スイス	[illegible]	実施済	[illegible]
10	平成28年度	[illegible]カンボジア事務所	プノンペン、カンボジア	[illegible]	実施済	[illegible]
11	平成29年度	Creativ-Ceutical	パリ、フランス	2017/4/1 [illegible]	実施中	[illegible]
12	平成29年度	Getty Conservation Institute	ロサンゼルス、アメリカ	2017/4/1 [illegible]	実施中	[illegible]
13	平成29年度	The Scripps Research Institute	フロリダ、アメリカ	2017/4/1 [illegible]	実施中	[illegible]
14	平成29年度	Lawrence Berkeley National Laboratory	カリフォルニア、アメリカ	2017/4/ [illegible]	実施中	[illegible]
15	平成29年度	(1)UNESCO [illegible] (2)UNESCO [illegible]（予定）	(1) [illegible] (2)パリ、フランス	(1)2017/4/1 [illegible] (2)未定	(1)実施中 (2)は調整中	[illegible]
16	平成29年度	(1)国際エネルギー機関（IEA） (2)経済協力開発機構（OECD）（予定）	パリ、フランス	(1)2017/4/1 [illegible] (2)未定	(1)は実施中 (2)は調整中	[illegible]
17	平成29年度	国際連合教育科学文化機関（UNESCO）	パリ、フランス	2017/4/ [illegible]	実施中	[illegible]
18	平成29年度	(1)国連開発計画（UNDP） (2)The International Water Association (IWA)（予定）	(1)ジュネーブ、[illegible] (2)ハーグ、オランダ	(1)2017年 [illegible] (2)未定	実施中	[illegible]

京都大学内外の協力体制

（ア）リーダーを養成するための学位プログラム等の構築

専任教員、協力教員＋研究指導委託教員（学内他研究科及び研究所の教員）及び連携教員（他機関）との協力による新たな運営体制の構築



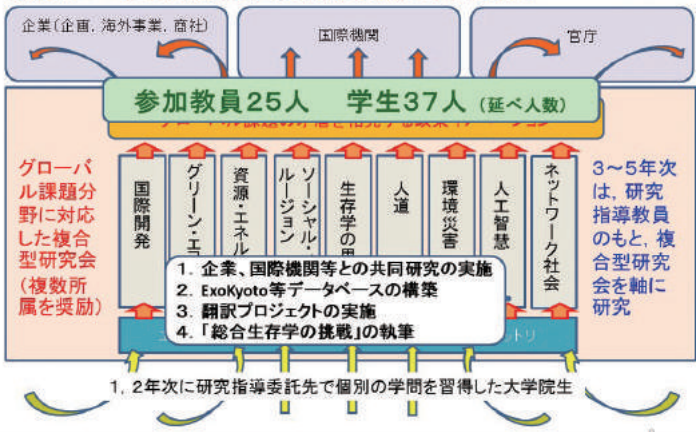
「総合生存学」の体系化

平成29年度：英語版の刊行
平成29年度続編「総合生存学の挑戦」の複合型研究会、修了生、学生による執筆

複合型研究会での「グローバル人材」の育成

政策イノベーションを提言して，社会実装できる博士人材を輩出

（ア）学位プログラム等の構築



グローバル課題分野に対応した複合型研究会（複数所属を奨励）

3～5年次は，研究指導教員のもと，複合型研究会を軸に研究

平成24年度　プログラム履修生の進路

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

Y君：国際連合食糧農業機関 FAO Hungary Office（JPP）に就職
所属：経済学研究科
専攻修行先：経済協力開発機構 OECD & 国際エネルギー機関 IEA

S君：行政機関（外務省）に就職
所属：農学研究科
専攻修行先：国際連合食糧農業機関FAO

I君：ERIA（Economic Research Institute for ASEAN and East Asia）に就職（休学中）
所属：法学研究科
専攻修行先：東アジア・アセアン経済研究センターERIA

L君：コンサルタント企業に就職
所属：農学研究科
専攻修行先：オーストラリア連邦科学産業研究機構CSIRO

在学生の志望するキャリアパス（アンケート結果）

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

平成24年度学生の就職状況

国際連合（FAO）	1名
国際機関	1名
官庁（外務省）	1名
企業（コンサルタント系）	1名

在学生2名が外務省専門調査員に合格。11月から2年間休学のうえ海外での実務を経験。

平成25年度入学生

平成27年度入学生

平成25年度以降の入学生の就職希望先（在学生の進路希望調査の結果）

国際機関	38%
民間企業	25%
政府機関	13%
起業・経営	6%
研究者	3%
その他	15%

外部評価報告書　平成29年2月

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

総論

思修館の理念と構想は時宜をえたものであり、先例のないユニークな試みとして関係者の苦労の中で、優秀な学生が育ちつつあり、課題を抱えながらも、教育・研究・社会連携の基盤が形成されつつある。

理念・構想

- 日本のトップ研究大学の教育・人材養成の新しいモデルになることを期待する。

学生について

- 教育研究体制が強化され、学生が格段に育っている。印象深かったのは、立派な専門性を持った学生が多いこと。
- 海外や国内でのインターンシップが、学生を大きく成長させている。
- 多様なキャリアを目指す学生を養成すべき
- 多くの学生がプログラムに満足している。「外から日本を見る、新しい自分の思考のフレームができた」と言っていたのも印象的。
- 社会人経験を有する学生の受け入れ、留学生（現状はアジアが中心）の多様化が必要。

教員・教育・研究について

- 学問の方法論、社会、企業、世界等と対話をするフレーム、独自の方法について、積極的に対外発信すべき。
- 外国人教員、英語の講義・熟語も増やし、多様な教育研究ができる環境を整備すべき。
- 国際機関や大学との連携、ネットワークを拡大し、共同研究を推進すべき。

ビジネス・企業との関係、対外活動（PR）について

- 思修館で育ってきた学生を見ると、こういう人材を一番求めているのは日本の企業。経済界や個別企業にもっとアピールすべき。
- 経済界－企業との連携は、学生への教育、研究に加えて、今後の資金確保の方策としても極めて重要。

課題と今後の方向について

- 思修館の理念と方法が、学内で理解され横展開されることが重要。
- 思修館の理念と目指す方向、ユニークな教育研究の方法、実際に育ってきた学生の能力と資質は京大全体にとって貴重な財産。
- 継続的にプログラムを進めていこうとすると、世代交代をどうするか。
- 学内への横展開は、思修館と大学の執行部と連携・共同で図れ。

総合生存学館生の評価

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

POフォローアップ報告書（平成29年3月）、外部評価委員会報告書（平成29年2月）、・海外武者修行先スーパーバイザー報告書等において、学生の評判が極めて高い。

・FAO本部（ローマ）で海外武者修行を経験し、PBRにおいてFAO、日本学術会議及び京都大学共同の市民公開シンポジウム「世界の食料の今そして未来」を企画運営した修了生は、外務省経済局に就職。（平成29年4月）本年5月「FAO事務局長講演及びジョブ・セミナー」において、外務省職員として自身のFAO海外武者修行の経験について講演した。

国連広報センターが持続可能な開発目標（SDGs）の周知と啓発のため、17の開発目標を表現した学生フォトコンテスト「わたしが見た、持続可能な開発目標（SDGs）」をグローバルに呼びかけ開催。
ブラジル、ペルー、アフガニスタン、日本など47カ国、5大陸から600を超える応募があり、著名な審査員による厳正な審査の結果、総合生存学館の学生の作品「Donation Food」が10の入賞作品の1つとして選ばれた。

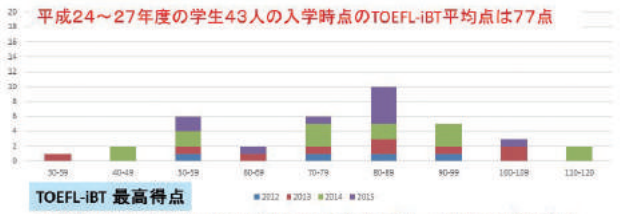
13

グローバルコミュニケーション力の向上

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

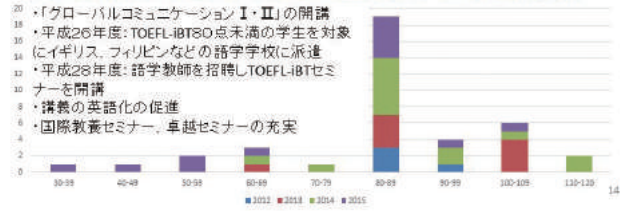
TOEFL-iBT 初回得点

平成24～27年度の学生43人の入学時点のTOEFL-iBT平均点は77点



TOEFL-iBT 最高得点

入学後のそれはTOEFL-iBT平均点は89点まで上昇し、平均で12点の向上



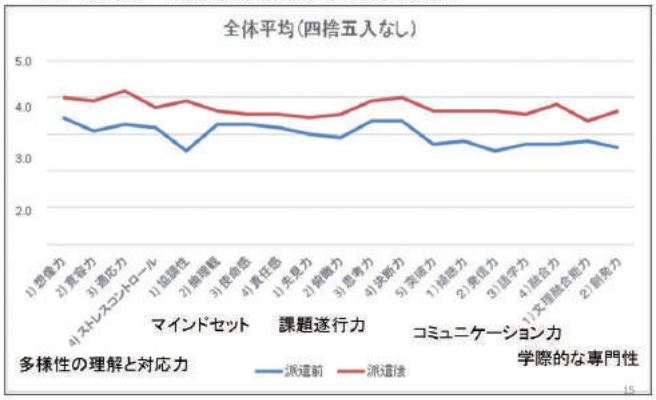
・「グローバルコミュニケーションⅠ・Ⅱ」の開講
・平成26年度：TOEFL-iBT80点未満の学生を対象にイギリス、フィリピンなどの語学学校に派遣
・平成28年度：語学教師を招聘しTOEFL-iBTセミナーを開講
・講義の英語化の促進
・国際教養セミナー、卓越セミナーの充実

14

国外インターンシップ（ミャンマー）調査に関わる学習効果に関わる評価

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

実習を通じて学生が修得する行動特性（以下、コンピテンシー）に着目した学生へのアンケート調査。海外武者修行に対しても分析中



15

履修生の進路、海外武者修行、PBR状況

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

第1期生進路状況（平成29年3月現在）
・国連機関（FAO）
・国際機関（ERIA）
・政府機関（外務省）
・企業（コンサルタント）

これまでの主な海外武者修行先
・国連機関（FAO, UNDP, UNESCO, UNEP, WIPO）
・国際機関（OECD, IEA, ERIA）
・国際NGO団体（IWA）
・グローバル企業（Creativ-Ceutical）, 研究所（GCI, TSRI）

IWA通勤の様子

第1期生PBLテーマ一覧
ロシア北極圏における天然資源ガバナンス
「食」「農業」における日本の現状、立ち位置と課題－産官学、また国際機関の視点から－
Healthier and Tastier: The sensory evaluation of Australian nutrition bars in Japanese consumers

100人の被験者（18-30歳）に対して味覚調査を実施

第2期生PBRテーマ（例）
・糸魚川水力発電プロジェクトを通した地域活性化・投資環境分析
・途上国の飲料水問題の解決に向け、水へのアクセス権をベースに住民参加を組み込んだ水道料金設定についてIWA世界大会でWS
・Transdisciplinary Science Test (TDST)の開発と評価
・Policy Dialogue -Trans-Disciplinary Research & Conference for Self-Help Group Approach-

16

社会連携事業の推進
京都大学Exuctive Leadership Program(ELP) by 思修館

（イ）修了者の成長とキャリアパスの構築

「務本之学、都（みやこ）八思」を基本体系として、企業・行政・自治体の幹部候補生を対象に、 次世代に向けた本質理解と世界観構築をめざしたアクティブラーニング。

日本経済新聞 朝刊掲載記事
2015年12月16日

橋会館での講義風景

思修館学生との交流会

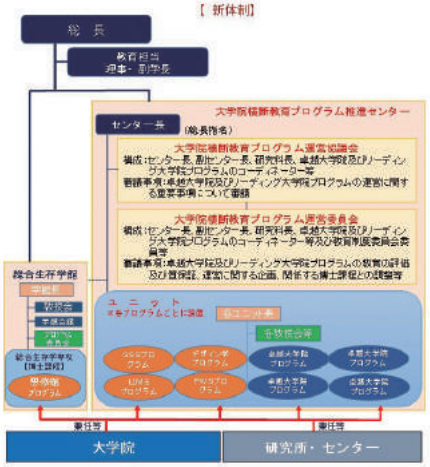
企業と大学のリーダー人材の交流の場でもある

17

学内体制について

【 新体制】

（ウ）事業の定着



30年度以降について
・学位プログラムの円滑な運営
・補助金終了後の激変緩和措置等の財務支援を実施

18

大学院研究科の創設

（ウ）事業の定着

既存の大学院

特定分野の教育
個別専門領域の研究

専門家の育成

新大学院
総合生存学館（思修館）平成25年4月

個人、地域社会、産業社会システム
地球全体の生存と未来開拓に関する
学術領域の研究
＋
文理融合の教養教育
リーダーシップ教育
多様な現場での実務実践

俯瞰的・総合的な視点から
課題解決のための問題設定力・
分析力・実践力を備えた
国際的リーダーの育成

19

グローバルな教育研究・生活環境

（ウ）事業の定着

- 第一研修施設（廣志房） 3.7億円
  - 学内予算で建設、平成25年4月供用開始
- 第二研修施設（船哲房） 3.7億円
  - 船井電機からの寄付金により建設、平成26年4月供用開始
- 東一条館（総合生存学館本館、3階第三研修施設） 22億円（土地込み）
  - 学内予算で建設、平成27年3月供用開始

東一条館

船哲房　　廣志房

20

国際機関・大学・企業との連携の強化

（ウ）事業の定着

国際機関等と大学間及び部局間学術交流協定を締結（24機関）し、国際シンポジウム（1－2回/年）、国際教育セミナー（4－5回/年）を開催するなど、大学の国際化を推進した。

連携　部局間学術交流協定等締結状況

分野	締結先	状況
国連機関等	経済協力開発機構（OECD）	締結済
	世界石炭協会（WCA）	締結済
	国連食糧農業機関（FAO）	締結済
	グローバルCCSインスティチュート（GCCSI）	締結済
	国連人口基金（UNFPA）	締結済
	米州開発銀行（IDB）	協議中
	東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）	協議中
大学	レジャイナ大学	締結済
	マッコーリー大学	締結済
	ハノーファー大学	締結済
	ロンドン大学ゴールドスミス校	締結済
	スタンフォード大学	締結予定
	アリゾナ州立大学	締結予定
	インペリアル大学	協議中
	ニューヨーク大学	協議中
	マサチューセッツ大学	協議中
	ハーバード大学	協議中
	ニューサウスウェールズ大学	協議中
	エジンバラ大学	協議中
	ケンブリッジ大学	協議中

分野	締結先	状況
企業	㈱ブロードバンドタワー	締結済
	川崎重工業㈱ 技術開発本部	締結済
	関西電力㈱ 地域エネルギー本部	締結済
	住友電気工業㈱ 研究開発本部nextセンター	締結済
	DMG森精機㈱	締結済
	大阪ガス㈱ 技術戦略部	締結済
	京都信用金庫	締結済
	㈱堀場製作所	締結済
	ラミック	締結済

国連機関等大学間学術交流協定締結状況

締結先	状況
国連教育科学文化機関（UNESCO）	締結済
国連環境計画（UNEP）	締結済
国連開発計画（UNDP）	締結済
国連食糧農業機関（FAO）	締結済
国際核融合エネルギー機構（ITER）	締結済
イエジン農業大学	締結済

21

学内外への発信

（ウ）事業の定着

・NHKETV特集「グローバル人材を育成せよ～京都大学・改革への挑戦～」が1時間番組で放映された。（平成27年4月）
・国連広報センターの学生フォトコンテスト「わたしが見た、持続可能な開発目標（SDGs）」に、学生の海外インターンシップ時の撮影作品「Donation Food」が入賞し、本件に関わるドキュメンタリー番組がNHKテレビで制作、報道された。（平成29年1月）
・学館学生企画の「産学連携バトル! in Kyoto」（文科省補助金）事業が採択された。（平成29年3月）
・総合生存学館の（1年次）学生がOECD Student Ambassador（2016年度）に選ばれた。

・第1回思修館の集い（参加者100名）：教職員・学内協力教員、研究指導委託教員、熟議講師、ELP履修生、寄附者など、内外の思修館サポータと学生の交流の場
・同窓会「遊聞会」（2017.8.5）の設立
・第２回思修館の集い　2017.10.18
・思修館プログラム総括シンポジウム　2017.10.18
・対外発信：HPの全面改訂、パンフレット（和文／英文）の更新、広報ビデオの作成、メルマガによる発信

https://www.youtube.com/watch?v=nh_GjZ6zjBI

第1回思修館の集い　2017.02.03

22

思修館基金（寄附金）について

（ウ）事業の定着

産業界等との連携による寄附金受領実績（見込みを含む）
合計金額　約740百万円

使途
- 研修施設の建設（平成25年度）　金額　376百万円
- 社会人研修プログラムの運営：京都大学 Executive Leadership Program by 思修館（平成27, 28年度）　金額　28百万円

（今後の予定）
- 海外武者修行の実施、マッチング（平成30年度以降）
- 国内外インターンシップの実施（平成30年度以降）
- 国際教育の実施（平成30年度以降）
- 熟議の実施（平成30年度以降）
- 研修施設の維持管理

23

総合生存学館の改革（平成30年度より）

（ウ）事業の定着

カリキュラム　入 試　**教育力強化**

・よりダイナミックで柔軟なカリキュラムへと進化
・社会人経験者などの博士学位ニーズに対応
・修士学位の授与と編入制度の導入
・長期履修制度の導入
・学内特別選抜の導入→学内からの志願者増

↓

国連機関・国際機関の幹部候補生の輩出
グローバル企業におけるリーダーシップ

実践研究　共同研究　**研究力強化**

・問題解決型の実践的な研究を推進
・企業ニーズに応じた産学共同研究
・地球規模課題の国際共同研究
・政策論文の生産（世界のオピニオンリーダー）

↓

エビデンス・ベースの政策展開
持続可能開発目標（SDGs）の達成に貢献

世界に開く新型大学院

国際連携大学院の機能
・世界トップレベル大学と協力
・途上国大学の支援

国連機関・国際機関のリエゾン拠点の機能
・FAO ローマ本部
・UNDP ニューヨーク本部
・UNEP ナイロビ本部
・UNESCO パリ本部
・OECD パリ本部
・IEA パリ本部
・ERIA ジャカルタ本部
＋これらの地域事務所等

国際力強化

24

Exploration

2 年生　関 大吉

太陽爆発現象の地球への影響予測

3 年生　孫　燁

総合知の探求と実践の関わり

1. 専門研究が行える環境
　査読付き学術誌への主著論文掲載や、国際・国内学会にて、各種発表を行ってきた。最近の研究成果に関しては、記者発表も行い、京都大学ホームページや京都新聞、市民向け天文雑誌に、その成果を掲載させて頂いた。
2. 学際研究の機会
　a) 金村准教授「太陽爆発現象の社会への経済的影響の試算について」
　b) 山敷教授 , 武田特任教授「太陽爆発現象の災害的側面について」
　c) 趙准教授「爆発予測機の開発について」
3. マインドセットの養成
　a) 有本特任教授「過去現在未来の時間軸と、世界中の関連諸機関との関係において、自分の研究がどこに位置しているか」
　b) 中谷特任教授「自分は何者で、どうなりたいのか。『自身のブランド化』」

　思修館は文理融合・異分野融合による知識とそれらを実践的に社会実装できる思考力と実践力を養成する場所である。単一の専門分野だけでなく、必要となる他分野（例えば哲学、教育）の知識も身に着けることで、研究課題を解決していることを自分自身の環境学の経験から説明した。

Kyoto

1年生　河崎 レイチェル 慧

グローバルリーダー出身はどこですか

どういった意味で、思修館は「ユニーク」なのか？何を求めて学生は思修館に来ているのか？

私の場合、思修館に来た理由は、私のアイデンティティ、そして私の属するコミュニティに関する問いと関係がある。思修館が、私たち自身と他者についてのより深い理解を促すことができる理由として、特に１）日本の伝統とグローバルな視点、２）文化交流、３）分野横断性、をあげることができよう。

1年生　石田　菖

世界から京都へ、京都から世界へ

1. 京都をベースにする重要性。

2. 思修館では様々な分野について学ぶ機会がある。講義、インターンシップ、熟議などを通して、学んだこと、感じたこと。

3. 多分野を学び、広い視野を持つことは、グローバルな課題を解決する上でも必要である。

Followership

5年生　長沼 祥太郎

リーダーには何ができないのか？

1. 学生が、多忙な研究・教育カリキュラム以外にも様々な活動を学生が企画し、実行している点は他の大学院にはないグローバル・リーダー養成型大学院である思修館の独自性である。

2. ここ思修館で様々な活動に関わっていく中で、私は何がリーダーにできて、何ができないのか、そして何をしていくべきなのかを学んだ。

3. 私の発表では、実際の思修館での主体的な活動を設立当初まで遡って紹介しながら、これらの学びについて説明を行う。

2年生　徐　ソウ

Sharing Leadership

本発表では、ミャンマーでの海外インターンシップの経験を通して、思修館の学生が実践しているリーダーシップが新しいものであることを説明したい。この新しいモデルの特徴は、

1. フォロワーシップとリーダーシップを統合している点

2. 現代社会の直面する課題によりよく向き合える点

3. リーダーシップにおける適応性と柔軟性を達成することを目的としている点にある。

Ph.D

３年生　田中　勇伍

社会問題のプロフェッショナルとしての
Ph.D を目指す

1. 社会問題は「悪構造」の問題
　– 問題そのものを理解する

2. 多様な価値観と政治の文脈
　－他者を理解する

3. 決断と実行
　－自己を理解する

５年生　平野 実晴

「思修館らしい」論文とは何か？

1. 従来の研究
　– 国際法学の立場から、水に関する様々なアクターの役割・機能を分析

2. 実践研究＝武者修行＆ PBR
　–International Water Association (IWA) にて、プロジェクト “Public participation in the regulation of urban water services” を実施

博士論文を執筆する中、国際法の理論枠組を通して、自らの社会実装を検証する、という形での構造化を試みている。

学生による活動報告の概要

海外武者修行中の４年生をのぞく各学年から２名ずつの在学生が、探求、京都、フォロワーシップ、Ph.D. の４つのキーワードに分けて発表した。

まず「探求」をキーワードに２年生の関大吉と３年生の孫ヨウが発表した。宇宙分野を専門とする関は、思修館の特徴として、ハイレベルな専門研究もできるということ、異分野の教員から学べること、そして社会の中での自分の研究の位置付けを意識させるようなマインドセットを挙げた。環境学を専門とする孫は幅広い分野を学べることを思修館の魅力として挙げ、哲学の授業での議論が、環境保全に関する知識と行動を起こすことのギャップを気づかせてくれ、地域での環境教育という実践へつながったと述べた。

次に、１年生の河崎レイチェル慧と石田菖が「京都」で学ぶ意味について発表した。主に米国で育った河崎は、アイデンティティや帰属意識という自身の研究関心と、伝統とグローバルの両方の視点を持つ京都で学ぶことの意義について、自身のパーソナルヒストリーを紹介しながら発表した。石田は文化実習や国内インターンシップでの学びを紹介しながら、地域の小学校で行っている教育分野での自身の研究を、グローバルな教育支援につなげたいという夢を語った。

続いて５年生の長沼祥太郎と２年生の徐ソウはリーダーシップとフォロワーシップの視点から思修館での経験を語った。長沼は、学生の様々な自主的活動を紹介し、一人の強力なリーダーができることの限界やフォロワーシップの重要性について論じた。リーダーシップを研究対象としている徐は、自らの研究と海外インターンシップの経験から、様々な専門性を持つ人が状況に応じてリーダーになったりフォロワーに回ったりする shared leadership という概念を紹介し、思修館がそのような新しいリーダーシップのモデルを実践的に生み出す場になっていると述べた。

最後に３年生の田中勇吾と５年生の平野実晴が、総合生存学での Ph.D. について発表した。社会人経験を経てエネルギー政策を研究している田中は、「課題の解決」で目指す望ましい社会とは何なのか、誰にとっての望ましさなのかを問うこと、学術と政策と公衆の間に立って課題解決にコミットすることを総合生存学の Ph.D. の意義として述べた。平野は水に関する国際法という自身の研究テーマが思修館のプログラムを通じていかに博士論文として結実しつつあるかを紹介した。そして、専門知と経験知の結合、学術アウトカムの多様化といった、思修館らしい博士論文のあり方が見えてきたと語った。

（文責　総合生存学館　磯部洋明）

第二部

開会挨拶

京都大学　総長　山極壽一

本日は、ご多忙にもかかわらず、総合生存学館の総括シンポジウムへ多くの方々にご参加いただき、誠にありがとうございます。京都大学を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

京都大学大学院思修館は、平成２３年度に文部科学省の「博士課程教育リーディングプログラム（オールラウンド型）」に採択された教育プログラムです。世界的視野で問題を見出し、現場に即して解決方法を創出し、判断・行動できるグローバルな人材の輩出を目指してきました。新設の大学院として立ち上げ、海外武者修行や教員と学生が泊まり込んで行う熟議を義務付けるなど、新しい企画をたくさん盛り込んだため、当初は多くの問題が生じました。それらの問題や課題に果敢に挑戦し、数々の成果を挙げて今日に至ったことは教員や学生諸君のたゆまぬ努力と精進のおかげと思っております。その多大なご尽力に対し、深く感謝したいと思います。

立ち上げから現在に至るプロセスをかいつまんで申し上げます。平成２４年度のみ、他の研究科から大学院生を受入れるプログラム履修制度を取り入れ、今年の３月に修了を迎えました。１人は国連機関（食糧農業機関 FAO）、１人は外務省、１人はグローバル企業へと就職し、思修館が目指す人材育成がある程度実現できたのではないかと思っています。

平成２５年度からは、１つの独立研究科である総合生存学館として学生を募集し入試を行い、総合生存学館に所属する大学院生に教育・研究を実施してきました。その第１期生が今年度５年生となり、ようやくすべての学年がそろいました。

海外武者修行先である東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）で評価され、休学をして事務総長の秘書官をしているプログラム履修生もおり、今年度外務省の専門調査員にも２名合格したと聞きました。それぞれ２年間の実務経験を積み、世界へと飛び出して行ってくれるものと期待しております。

また、日本学術振興会（JSPS）から補助金を７年間いただき、充実した教育を行うことができました。東一条館を始め、研修施設も充実させてきました。産業界からの思修館基金へのご寄附も研修施設の建設に大いに役立たせていただいた次第です。これらのご支援により、学生たちは生活の心配をすることなく、教育や研究に専念することができました。しかしながら、そのからの補助金も今年度で終了するため、このたび、この７年間を総括するシンポジウムを計画いたしました。

本日の午前中は、海外武者修行に行っております４年生を除き、各学年２人ずつ教育や研究、カリキュラム、学生生活など、学生の視点から様々な発表を行いました。午後は、このあと文部科学省高等教育局から三浦和幸大学振興課長からご挨拶をいただきます。三浦課長はこの７月まで本学の財務部長をしておられましたので、総合生存学館のこともよくご存知かと思います。文部科学省として、今後の総合生存学館に対してご助言・ご提案をいただけますと大変ありがたく

存じます。

そのあとは、基調講演、パネルディスカッションと続きます。思修館へは、その趣旨にご賛同いただき、物心両面のご支援をいただいておりますサポーターともいうべき方々が多数おられ、本日はそういった方にご登壇いただきます。本シンポジウのテーマは「思修館に期待するもの」となっておりますが、期待をこめた苦言・提言、いい事・悪いことも含めて率直なご意見をいただけますと、今後の励みになると思います。

特に、常に指摘されております学生定員の確保という課題につきましては、常々努力しているところではありますが、いまだ達成できておりません。しかしながら、平成３０年度入学者募集につきましては、志願者数・合格者数とも過去最高であったと聞いておりますので、少しずつではありますが、総合生存学館の目指すところが学内外に知られてきたのではないかと思っております。

せっかくそういった成果が出てきたところではありますが、今後、補助金終了・教職員の減という最大の難所を迎えます。教育の質を落とすことなく、様々な工夫で乗り越え、本日ご参加いただきました皆さまの激励によりさらに一回り成長することができますようご理解とご協力をお願いしたく存じます。

本日は学生諸君も多く参加しております。多くの方々に支えられていることを自覚し、総合生存学館と言う名前・思修館と言う名前を誇りに思えるよう精進してもらいたいと思っています。

最後になりますが、本日ご参加いただきました皆さまにとりましても有意義なシンポジウムとなりますよう期待し、私の開会の挨拶といたします。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

来賓挨拶

文部科学省高等教育局
大学振興課長
三浦　和幸

三浦和幸 文部科学省高等教育局大学振興課長よりご来賓の挨拶をいただいた。三浦課長は 7 月まで京都大学に在籍され、その後リーディング事業を担当する大学振興課に移られた。冒頭、思修館プログラム創設の経緯についてのご説明があった。思修館プログラムを含む博士課程教育リーディングプログラムは平成 23 年に始まった事業である。大学院教育をサポートするプログラムとしては、平成 14 年の 21 世紀 COE にはじまる研究拠点形成事業 (272 拠点採択) があり、そのなかで博士後期課程の学生を養成してきた。後継事業のグローバル COE は 140 件であったが、これら拠点事業の課題は、博士後期学生を養成する事業であるため、伝統的なアカデミア養成に偏るきらいがあった。そこでこれらの後継事業として 5 年間一貫プログラムのリーディングプログラムが作られた。専門分野の枠を越えて、俯瞰力、独創力を備え、広く産官学の分野でグローバルに活躍できる人材養成を目標に、平成 23 年度からのリーディングプログラムには、7 件のオールラウンド型、40 件の複合型、15 件のオンリーワン型があるものの、オールラウンド型がリーディングプログラムの理念を一番体現しているとの考えが示された。その中で特に思修館プログラムは、事業の前から京都大学で構想され、全学をあげた意欲的な取り組みであるとともに、組織的にもいち早く独立研究科を設置し、資金面でも外部資金を集めた研修施設を建設、教育面でも八思や海外武者修行の概念を取り入れるなど、ハードではあるもののリーディングプログラムの象徴的な取り組みであるとの認識が示された。その中で、思修館の理念、取り組みが本当に実現するのかという課題について、担当課として強い関心を抱いているとのメッセージをいただいた。

続いて、思修館プログラムの現状をより良くするための叱咤激励のお言葉があった。開始 4 年目の中間評価を踏まえ、特に総合生存学の学理が確立しているか、幅広い学生のキャリア要請・育成に対応できているか、全学的な協力体制が機能しているかといった課題が問われている、との具体的なご示唆をいただいた。

そして最後に、本総括シンポジウムの機会を通じて、思修館プログラムの今後の方向性をしっかり学内外で共有し、このプログラムで真のグローバル人材をどのように実現していくのかを明らかにすることを皆様にお願いして挨拶といたしますといった、思修館への強い期待感と心強く温かいお言葉をいただいた。

（文責　総合生存学館　金村宗）

基調講演 1

北野 正雄 (きたのまさお)

京都大学理事・副学長（教育・情報・企画担当）

1977 年 3 月	京都大学大学院工学研究科修士課程　修了
1977 年	京都大学工学部助手
1984 年 --1986 年	プリンストン大学物理学科助手
1988 年	京都大学工学部講師
1992 年	京都大学工学部助教授
1996 年	京都大学大学院工学研究科助教授
1999 年	京都大学大学院工学研究科教授
2012 年 --2014 年	京都大学大学院工学研究科長・工学部長
2013 年 --2014 年	京都大学国際高等教育院長
2014 年 --	京都大学理事・副学長

北野正雄、京都大学理事・副学長の基調講演では、「開放系としての大学：高校、社会とのよりよい接続をめざして」と題し、大学全体の教育について現状の課題や京都大学の取り組みについて、入試を通じて学生が入り就職等の形で出てゆく外部に開かれた開放形として大学を捉える視点から紹介があった。

まず入試における課題としては、入学者の地域、高校のタイプの偏在や、留学生数増加の停滞といった点が挙げられた。そしてこれを受けて導入された特色入試が、出身高校・地域の多様化や女子学生比率の向上などの一定の成果を挙げていることが紹介された。また高校とのコミュニケーション強化の取り組みとして、グローバルサイエンスキャンパスという高大連携事業や、博士課程の大学院生を高校に派遣する学びのコーディネータ事業などの説明もあった。学びのコーディネータ事業には、思修館の学生からも積極的な参加がある。

社会との接続という観点からは、産業界で求められている専門的知識ニーズと大学の研究者の数にミスマッチがあることが具体的なデータで示された。そして大学院教育の課題として、身につけた専門性を社会の様々なセクターでも活用できるような、汎用性を持った「トランスファラブルスキル」の獲得が強調された。これはリーディングプログラムの重要な目的の一つであり、リーディングの成果と課題を検討しながら京都大学全体として新しい体制を作って大学院共通教育の充実を図っていることも紹介された。

最後に、思修館のような融合型教育プログラムにおいて重視されるべきこととして、教育担当理事としての考えが述べられた。まず、様々な専門家の単純な寄せ集めであってはならず、かといって専門性を捨てるべきではない。専門性と汎用性のバランス、基礎研究と社会実装に直結する研究のバランス、自主性の重視と計画的な教育プログラム設計のバランスなど、様々なバランスが重要であるとの指摘があった。そして、それらの一見対立する方針の間のギャップを埋めるのではなく、それぞれの存在意義を十分に踏まえ、適切な架橋の方法を考えるべきだということ、そしてプログラム化が全てではなく、さまざまな機会（場）や人的なつながりが果たす教育機能も重要であるということが述べられた。

思修館プログラムの意義と今後の課題について、京都大学における全学的な教育という観点から俯瞰することができる基調講演であった。

（文責　総合生存学館　磯部洋明）

基調講演２

白石 晃將 (しらいし こうすけ)

外務省経済局経済安全保障課　外務事務官

2017 年 3 月　京都大学大学院農学研究科博士後期課程　応用生命科学専攻修了　　博士（農学）
2013 年　国際協力機構（JICA）青年海外協力隊短期ボ　ランティア（バングラデシュ）
2015 年 --2016 年　国際連合食糧農業機関　インターンシップ
2016 年 --2017 年　日本学術振興会特別研究員
2017 年 4 月　外務省経済局経済安全保障課外務事務官　採用
2012 年 --2017 年　博士課程教育リーディングプログラム「京都大学大学院思修館」プログラム　修了

思修館プログラム履修第１期生で，現在は外務省経済局経済安全保障課に勤める白石晃將氏から，「思修館で得られるもの，見える世界」と題した講演があった。履修第１期生は各研究科に所属しながら同プログラムを履修していたため，白石氏は，微生物学分野の研究で博士号（農学）を取得し，本年３月に京都大学大学院を修了している。

「自分は将来何がしたいのか，目標達成のための具体的な施策は何か，その答えを見つけるヒントを与え，着実に前進する支援をしてくれたのが思修館である。」冒頭，白石氏はこのように述べ，講演中，思修館と歩んだ５年間での自身の成長を具体的に説明した。

１，２年次はインプットの年。各界の超一流リーダーを講師として招いた熟議や国際シンポジウムから，各分野の最前線で起きている世界的課題に対する知見を深めた。また，これからの日本を背負わなければならないという自覚が芽生え，将来活躍したい場所，貢献したい分野を探し始めた。３年次は，研究分野での知見の蓄積と思修館での学びが相まって，これまでの取り組みが成果となり始めた年。いくつかの国際学会に参加し，世界最先端の技術や研究者の目線を学ぶと同時に，自身の研究分野では，若手研究会を設立し，初代座長を務めた。４年次は，国連食糧農業機関（FAO）にて１年間のインターンシップを行った。遺伝子組換え食品の安全性評価に関わる職務にやりがいを感じ，世界の大舞台で活躍する基盤を身につけ，論理的思考力や時間管理能力を飛躍的に向上させて帰国。５年次には，プログラムの集大成として，食の科学技術に関するシンポジウムを開催。企画・立案から，資金調達，講演者との調整に至るまで一人でその準備をこなし，当日は１５０人を超える聴衆を集め，東京での同会は大盛況のうちに終了したことを語った。思修館で培ってきたマネジメント力や調整力を発揮し，科学技術分野での人的ネットワークを活かした彼ならではのプロジェクトであろう。

現在は思修館での学びを活かし，外務省での仕事に励んでいる。１０年後の自身の姿を想像しつつ，日々の業務では，どんな仕事にも積極的に取り組む中で，そのノウハウをスポンジのように吸収し，高いアウトプットを出すことを心掛けていると述べた。また，感謝すること，つながりを大切にすることも重要な点として挙げ，末尾として，学生時の活動に支援くださった全ての方々に対する謝意を述べた。

（文責　総合生存学館　金村宗）

基調講演 3

森 雅彦 (もり まさひこ)

DMG 森精機株式会社　代表取締役社長
1985 年 3 月京都大学工学部機械系学科精密工学専攻　卒業
1985 年　　伊藤忠商事株式会社　入社
1993 年　　株式会社森精機製作所　入社
1999 年　　株式会社森精機製作所　取締役社長　就任
2013 年　　DMG 森精機株式会社　取締役社長　就任
2003 年　　東京大学学位 (工学博士)　取得
ドイツ DMG MORI SEIKI Aktiengesellschaft 監査役
社団法人日本工作機械工業会 副会長
CIRP フェロー、SME フェロー、京都大学大学院思修館特任教授、
大阪工業大学客員教授、経済産業省 平成 28 年度地域中核企業創出・支援事業グローバル・コーディネーター、財団法人ベルリン日独センター評議員

DMG 森精機株式会社代表取締役社長森雅彦氏より，「思修館に期待するもの」と題した基調講演が行われた。冒頭、森社長より思修館を応援するきっかけとして、今後日本において文系の博士の数を増やす必要があるとの見解が示された。DMG 森精機株式会社においては、日本人博士 50 人全てが理系の工学博士であるのに対し、ドイツ人博士は半分がマーケティングなどの文系であるとの状況や、社長会において各企業でひとりずつ博士を取ろうと言っても直ぐには賛同いただけないとの現状から、日本人の文系博士の数そしてその存在感への危機感が強く伝わってきた。

続いてビジネスの立場から、近い将来変わっていくこと、直面する課題および準備すべきことについて、示唆に富んだ展望が示された。今までの衣・食・住という考え方から、移動・知識・健康という考え方に生活のベースとなる考え方が変わっていくであろうとの見解が示された。そして直面する課題・準備すべきこととして、EV 化・AI 化・高齢化は勿論のこと、その全体を包括する、シェアリングについても考えないといけないとのことであった。加えて、ビジネス上の課題として、同時 5 軸化・自動化・複合化の問題はあるものの、そこに共通するのは教育であるとの説明がなされた。そこでの教育として、今ある文系・理系といった分け方ではなく、リベラルアーツといった共通教育が必要であろうとのサジェスチョンがなされた。

そして学生に対して、ダイバーシティを理解すること、長期で物事を見る俯瞰力をつけることの重要性についてのメッセージが送られた。人種×国籍×男女×老若×能力などのダイバーシティに加え、身近なところでは京大生か否かという点もダイバーシティを理解する上で学生諸君が卒業後すぐに直面する重要な問題であるとの説明があった。今は能力が高い人しか周りにいないと思っているかもしれないが、卒業後はそうではない。色々な人の中で嫌われないようにして組織を動かすといった能力も身に着ける必要があるとのこと。そして長期で物事を見る俯瞰力として、10 年計画・100 年計画でものごとを考えて欲しい。何ごとも 10 年続けると一人前になれると思うといった学生への心強い応援がなされた。

最後に、森社長から思修館についてはこれからも継続的に応援していきたい、という心強いお言葉をいただき、できるだけこの試みが長く続くように祈念しているとの有難いお言葉で基調講演が締め括られた。

（文責　総合生存学館　金村宗）

パネリスト

久能 祐子（くのう さちこ）

S&R 財団　理事長兼 CEO
１９８２年３月　京都大学大学院工学系研究科博士課程　修了
Halcyon 創設者兼議長
スキャンポ・ファーマシューティカルズ社
　共同創業者兼初代 CEO
S&R Technology Holdings, LLC
　共同創業者ならびに業務執行役員
RUSK Intellectual Reserve AG 共同創業者ならびに理事
ジョンズホプキンス大学　理事
モーリーン＆マイク・マンスフィールド財団　理事
メリディアン国際センター THIS for Diplomats 諮問委員会メンバー
京都大学大学院　総合生存学館　特任教授
京都大学経営管理大学院　特命教授
京都造形芸術大学 文明哲学研究所客員教授

ミュンヘン工科大学での研究員生活を経て、1980 年代に株式会社アールテック・ウエノを共同創業。 1994 年には初めてのプロストン系緑内障治療薬となる「レスキュラ点眼液」の商品化に成功。 その後、アメリカに拠点を移し、スキャンポ・ファーマシューティカルズ社を共同創業し初代 CEO となる。 同社でもプロストン系新薬の研究開発、会社経営に携わり、慢性特発性便秘症及び過敏性腸症候群治療薬「アミティーザ」の商品化に成功。 さらに 2012 年には、革新的ワクチン開発を目指す VLP セラピューティクスを共同創業した。

社会起業家としては、S&R 財団を設立し理事長兼 CEO を務めるほか、ジョンズホプキンス大学、マンスフィールド財団等の理事でもある。

これまで多数の賞を受賞し、2017 年には、「エイボン女性年度賞 2016 大賞」および「Harvard Business School club of Japan Business Stateswoman of the Year for 2016」を受賞。Forbes 誌の「アメリカで自力で成功を収めた女性 50 人」にも選出（2015 年）されている。

京都大学大学院工学系研究科博士課程修了、ジョージタウン大学経営学認定コース修了。

有本 建男 (ありもと たてお)

国立大学法人政策研究大学院大学　教授
国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター
　上席フェロー　兼務
1974 年　3 月　京都大学大学院理学研究科修士課程　修了
1974 科学技術庁入庁
科学技術庁研究振興局科学技術情報課長、原子力局廃棄物政策課長、科学技術政策局政策課長、宇宙開発事業団ロス・アンジェルス所長、海洋科学技術センター企画部長、日本原子力研究所広報部長、理化学研究所横浜研究所研究推進部長、内閣府大臣官房審議官（科学技術政策担当）、文部科学省大臣官房審議官（生涯学習政策担当）
2004 年文部科学省科学技術・学術政策局長
2005 年内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官
2006 年独立行政法人科学技術振興機構　社会技術研究開発センター長
2012 年政策研究大学院大学教授（現在に至る）
（独）科学技術振興機構　研究開発戦略センター副センター長兼務
2015 年（国研）科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー兼務
著書　「科学的助言－ 21 世紀の科学技術と政策形成」（共著　東京大学出版会　2016 年）など
　長年、国の科学技術基本計画の策定、実施、評価に参画している。東日本大震災では日本学術会議の緊急提言づくりなどにも参画。OECD の科学助言に関する研究プロジェクトの共同議長、外務省科学技術外交推進会議委員、国連 STI for SDGs 参加メンバー。

中村 和男 (なかむらかずお)

シミックホールディングス株式会社　代表取締役会長兼社長執行役員
1969 年　3 月　京都大学薬学部　卒業
1969 年　三共株式会社（現　第一三共株式会社）　入社
1992 年　シミック株式会社（現　シミックＨＤ）代表取締役就任
2008 年　金沢大学大学院自然科学研究科博士後期課程　修了
2013 年　シミックホールディングス株式会社　代表取締役会長兼社長　執行役員　就任

　1992 年、日本で初の CRO（医薬品開発支援）としてシミックを創業。現在シミックグループは、開発支援のみならず、CDMO（医薬品製剤開発・製造支援）事業、CSO（医薬品営業支援）事業、ヘルスケア事業、IPM（Innovative Pharma Model; 新しいプラットフォーム型製薬）事業にまでビジネスを拡大させている。
　近年では、国立研究開発法人日本医療研究開発機構における AMED 課題評価委員として参画しているほか、京都大学に於いては 2017 年 3 月まで薬学研究科連携教授を務める。

岩澤 康裕 (いわさわ やすひろ)

電気通信大学大学院情報理工学研究科 特任教授
同大学燃料電池イノベーション研究センター センター長
1968 年東京大学理学部卒業
1970 年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
1972 年東京大学大学院理学系研究科博士課程中退
1972 年横浜国立大学工学部助手
1984 年東京大学理学部助教授
1986 年東京大学理学部教授
2005 年～ 2007 年東京大学理学系研究科長・理学部長
2009 年東京大学名誉教授
2009 年電気通信大学電気通信学部　教授
現在、電気通信大学大学院情報理工学研究科 特任教授　燃料電池イノベーション研究センター長
専門分野： 触媒化学、表面科学、放射光科学
著書：XAFS Techniques for Catalysts, Nanomaterials, and Surfaces, Springer, NY (2016) 、ベーシック表面化学 (4 刷)、化学同人 (2014)、他
研究活動：1996 年～ 2001 年科学技術振興事業団 CREST 代表研究者、2002 年～ 2007 年 21 世紀 COE 拠点リーダー、2015 年～ 2020 年 NEDO 固体高分子形燃料電池利用高度化技術開発事業／普及拡大化基盤技術開発／ＭＥＡ劣化機構解明サブリーダー
受賞：日本 IBM 科学賞 (1990 年)、井上学術賞（1996 年）、触媒学会学会賞 (1999 年)、日本表面科学会学会賞（2000 年）、紫綬褒章受章 (2003 年)、日本化学会賞（2004 年）、他
学会活動：日本学術会議三部 (理学・工学) 部長 (2008 ～ 2012 年)、日本化学会会長（2010 ～ 2012 年）、他

Mbuli Charles BOLIKO（ンブリ・チャールズ　ボリコ）

国籍：コンゴ民主共和国
Bachelor’s degree in Psychology and a Master’s degree industrial Psychology （University of Kisangani, コンゴ民主共和国）、Master’s degree 及び Ph.D. in International Development （名古屋大学）、Diploma of dvanced Studies in Strategic Management of Human Capital （University of Geneva, スイス）
国際連合食糧農業機関　駐日連絡事務所　所長
1997 年　名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程修了
2013 年　国際連合食糧農業機関駐日連絡事務所長
前職はチーフとして、Recruitment and Staffing Branch (CSHR) in the Human esources Management Division を管轄、同組織における人事を担当
FAO 経歴：リエゾン職員として国連本部の FAO リエゾン事務所、Senior Attaché de Cabinet として、Office of the Director-General of FAO 等での要職
その他にも母国であるコンゴ民主共和国の大学にて教鞭（Management and dministrative Law）を執りながら、同国の青年スポーツ省へのアドバイザーを兼任

パネルディスカッションの概要

本シンポジウムのテーマ「思修館に期待するもの」を踏まえて、パネルディスカッションでは３つのサブテーマ：①グローバルリーダーの育成のための国際教育について、②総合生存学の研究について、③京都大学の大学院改革と思修館の試みについて、を設定した。パネリストとして、5 名の先生方：久能祐子博士（米国の S&R 財団理事長）、有本建男教授（政策科学研究院大学）、岩澤康裕教授（電気通信大学）、中村和男博士（シミックホールディングス株式会社代表取締役 CEO）、ンブリ・チャールズ・ボリコ博士（FAO 駐日事務所長）をお招きした。

各パネリストに順番に資料を使って話題を提供いただいた。まず、久能博士からは、サブテーマ①について話題提供があった。次世代リーダーは、ディスラプティプイノベータ、リスクテイカーであり、大きい社会インパクトをもたらすことが要求される。リーダーに必要なやり抜く力は自分で物事を決めることによって身につく。リーダー教育では、1 人でも実行できる、実験的試行錯誤を怖がらない、一流のフォロワーでもある、教えるのではなくみんなで学ぶことが重要である。久能博士の運営する Halcyon は、思修館の運営の参考になるであろう。次に、有本教授からは、サブテーマ②および③について話題提供があった。Sustainable Development Goals (SDGs) は、北朝鮮をふくめて世界が合意した人類共通の目標である。近年、東大や日本化学会など、アカデミアの動きも活発化してきた。SDGs は 21 世紀のゴールデンギフトであり、 Science Technology Innovation (STI) システムを変換するチャンスととらえる。思修館で何ができるかを考える。岩澤教授からは、サブテーマ②および③について話題提供があった。英国の大学と比較して、日本の学部は上だが大学院で逆転する。思修館は日本の大学院教育について重要な課題を投げかけた。総合生存学の基本は、弛まぬ科学・技術の創成により , “ 人類 ” および全ての “ 種 ” に豊かで文化的で持続可能な社会を構築することにある。批判はあるが、10 年／ 100 年つづけることが必要である。中村博士からは、サブテーマ①について話題提供があった。企業にとってのグローバルリーダーの育成に関して、リーダー候補者のシンガポール派遣や米国派遣の事例を紹介した。その経験から分かったこととして、専門性、箱からでる（Out of the Box）、ことば、コミュニケーションの重要性を指摘した。特に、パーソナリティが重要であるが、そのためには小学校教育から変えることが必要である。最後に、ボリコ博士からは、サブテーマ①について話題提供があった。国連で採用されるために必要な要件として、学歴、言語、実務経験を挙げた。日本人は言語が原因で採用されないケースが目につく。博士号を持っていることは非常に大きい強みとなる。博士号取得者は、実務経験がなくても 1 年与える場合ある。「石の上にも三年」を挙げて、何回もチャレンジすることの大切さを指摘した。

パネリストからの話題提供に引き続き、和やかな雰囲気の中で活発な議論が行われた。モデレータからの質問にパネリストから質疑応答をいただくだけでなく、会場の参加者からも有益なコメントや質問が出された。

（1）「米国では、物事をゼロベースで考えて社会をデザインするイノベーターがいる。社会的な観点での disruptive なイノベーターを日本から輩出するには何が欠けているのか？」

久能博士　「とにかくやってみることが大事である。根拠のない自信が重要である。最悪の事

態を事前に想定して、ハイリスク・ハイリターンをとればいい。」

中村博士　「洞察力、Global ethics である。黒船が来た時、これが国際化と思うのではなく、黒船に乗った人が日本を見た時にどう思うか考える。これが、out of box である。」

２）「日本では大学院になると評価が低下するのは、システムのどこに問題があるのか？」

岩澤教授　「日本の学部のカリキュラムは、レベルが高い。アメリカ・ヨーロッパでは、学部を当てにしていない。しかし、大学院を出ると、見違えるようになっている。今の大学院教育で、既存の踏襲的な discipline しか教えられないという実態の中では、グローバルな人材は育たない。」

中村博士　「特徴のある大学が必要である。就職というのは個人の問題であって、大学が斡旋することではない。大学院でなされている教育は、狭すぎる。」

三浦課長（文科省）　「日本の大学院教育が問題と言われているのは事実である。課程制大学院という考えが浸透しなかった。学位をどう位置付けるのか。大学院生の学習時間が圧倒的に少ない。そして、学生の満足度も圧倒的に低い。」

山敷教授（総合生存学館）　「そこを思修館で改善したいと思って行ってきた。国際機関でポストを獲得するなど、その成果が出てきたのではないのか。」

（３）「SDGs は、STI システム転換のチャンスである。大学院が抱える問題、新しいタイプの研究のあり方について、総合生存学館はどのように取り組むべきなのか。」

有本教授　「学生には、課題設定力が要求される。課題設定の力、実装するための方法論を議論しよう。関西で（京都で）、そのような雰囲気を醸成することが必要ではないか。」

久能博士　「あまり悲観することなく、初期の思いを行えばいい。結果が出るか、やってみようという経験を積むことが大切ではないか。やり抜く力。成功するまでやる。」

ボリコ博士　「日本人を取りたくないという話を国連の中で聞く。原因の 90% は言葉の問題である。学生は言葉を勉強すべきである。国連に来たら、残ってほしい。」

李さん（総合生存学館大学院生）　「世界知的所有権機関（WIPO）でインターンシップを行った。思修館が、そこでイノベーションを行うことを期待されていると思うが、勉強することばかりだった。」

久能博士　「イノベーションは、国連では起きない。キャリアは、ひとつではない。自分の力が生かせるところに行けばよい。総合生存学的なプロデューサーとなるのは、必ずプラスとなるときがくる。初心に帰って、全学で信じることである。」

最後に、川井教授（総合生存学館、思修館プログラムコーディネータ）が思修館プログラムの総括ステートメントを読み上げ、会場の参加者全員の拍手をもって賛同を得た。

（文責　総合生存学館　池田裕一）

思修館総括ステートメント

思修館総括ステートメント

博士課程教育リーディングプログラム「京都大学大学院思修館」の総括シンポジウム及び第 2 回思修館の集いを 2017 年 10 月 18 日に行いました。思修館プログラムに参画した私たち、学生、教職員及びすべての参加者は、本プログラムの 7 年間の成果を確認し、思修館総括ステートメントとしてここに取りまとめました。本プログラムの実施にあたり、ご支援・ご協力をいただいた文部科学省、日本学術振興会、学内外のあらゆる組織や支援者の皆様に厚く感謝申し上げます。

• 思修館プログラムは、文化・産業・経済・国家などの複雑で巨大なシステムに関わる多様でグローバルな課題の解決のために、持続可能で創発力のある社会システム構築に向けてリーダーシップを発揮できる人材の育成を教育の目標としています。

• 京都大学大学院総合生存学館（思修館）は、こうした教育理念のもと社会の要請に応え、未来のリーダー育成を目的として平成 25 年 4 月に設置され、「総合生存学」という新しい学問の構築を目指してきました。「総合生存学」とは、「人類と地球社会の生存」を基軸に、関連する諸々の学問体系の「知」を結びつけ、複合的な社会課題の発掘・分析と定式化・構造化を行い、社会実装までの解決を探求する総合学術です。

•2017 年 3 月において思修館プログラムの第 1 期生 4 名は国際機関（国連食糧農業機関 FAO、東アジア・アセアン経済研究センター ERIA）、政府機関（外務省経済局）、コンサルタント系グローバル企業にそれぞれ就職して、国際的に活躍しています。また、本年 8 月には卒業生と在学生が協力して同窓会「遊聞会」を設立しました。

• 総合生存学館は、専門（総合生存学）研究を柱に、国内外サービスラーニング（SL）、海外武者修行やプロジェクトベースリサーチ（PBR）などの実践型研究と産官連携特別セミナー（熟議）や八思などのリーダー教育、国際教育を加えたプログラムに取り組みました。海外武者修行には、多数の国際機関、研究機関のほか、国際 NGO、財団、民間企業に学生を派遣しています。SL には、国内は京都市内・府内の福祉施設、国外は当初は JICA と協力してバングラデシュに、その後治安情勢によりミャンマーに派遣しました。

• 教員と学生のアイディアに基づいてグローバル課題に対応した 9 つの複合型研究会を立ち上げ、実践型研究を軸とした総合生存学の構築に取り組みました。具体的な成果としては、再生可能エネルギー普及のための投資障壁や政策プロセスの分析、歴史学・考古学知見と先端自然科学を両輪とした超極端自然災害に対する防災研究、グローバルな水循環と持続的な水資源管理に関する技術面と法律面の総合的研究などがあります。特に、学生は複合型研究会の活動と自ら企画した PBR を通して、社会実装を意識した実践型研究等に取り組みました。たとえば、地方自治体と協力して小水力発電事業を運営する企業を起ち上げ、それを通した地域活性化・投資障壁の分析、西田哲学の実践的応用としてのカンボジア地域コミュニティにおける自助グループ、行政、国際

援助機関の対話スキームの構築などの PBR が実施されました。このような社会実装に関わるケースの集積が、総合生存学の確立に大きく貢献するものとなります。

• これまで、総合生存学に関する研究会（思修館懇話会、月一度）、学生の教育指導やリーダーシップ教育のあり方について自由な観点から幅広く検討する教員懇談会（月一度）などを実施し、思修館プログラムの教育研究の目標や方向について理解の共有化をはかってきました。また、平成 27 年 7 月に「総合生存学―グローバルリーダーのためにー」（京都大学学術出版会）を刊行し、学館テキストとしています。本書籍の執筆・編集の過程で総合生存学の学理に関して多くの議論と教員の理解の共有を積み上げました。現在、本書籍の英語版を編集中です。さらに、続編「総合生存学の挑戦」を教員、修了生、学生の協働により執筆を予定しています。

• 国際機関、大学、企業等と大学間及び部局間学術交流協定を 24 件締結し、国際シンポジウム（1 － 2 回 / 年）、国際教育セミナー（4 － 5 回 / 年）を開催するなど、大学の国際化を推進しました。

• 学内外から多くの方々のご支援を得て、総合生存学館の本館である東一条館、研修施設として廣志房、船哲房を建設しました。

• 大学としては、大学院横断プログラム推進センターを新たに設置して学内体制を整え、リーディングプログラム等の学位プログラムの円滑な実施運営に務めています。総合生存学館においては、学館および思修館プログラムの教員組織・運営体制を整備し、専任教員、協力教員、学内他研究科及び研究所の教員及び他機関との協力体制を構築しました。

• 「務本之学、都（みやこ）八思」を基本体系として、企業・行政・自治体の幹部候補生を対象に、京都大学 Executive Leadership Program(京都大学 ELP) by 思修館を起ち上げ、実務経験豊富な社会人向けの学習の機会を提供しました。

• 最後に、思修館プログラムは、人類や社会システム、地球社会などにおける今日的な問題の本質を理解して生存学に関わる一体的な世界観・人間力・社会力をもとに自ら課題を設定し、その解決への営みを通じてグローバルリーダーとなる人材を育成する場を確立することができました。文科省のプログラム補助金が今年度で終了する大きな節目を迎えるなか、これまでの思修館の取り組みの成果を内外に広くアピールするとともに、明日の総合生存学館の教育研究をより良いものにしていく所存です。皆様のこれまでのご支援とご協力に深く感謝申し上げるとともに、今後ともお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

京都大学 大学院 総合生存学館
思修館

〒606-8306 京都市左京区吉田中阿達町 1
京都大学東一条館
京都大学大学院総合生存学館
TEL　075-762-2001 / FAX　075-762-2277
https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp

編集　池田裕一　池田有加里　泉拓良　磯部洋明　金村宗　河合江理子
川井秀一　積山薫　高見純子　寶馨　趙亮　DEROCHE, Marc-Henri
石田菖　河崎レイチェル慧　徐聡　関大吉　孫燁　田中勇伍　長沼祥太郎
平野実晴